関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

パーソンセンタード・アプローチの視点からみた地域臨床

その他のタイトル	Person-Centered Perspective in Community Based Clinical Psychology
著者	中田 行重
雑誌名	教育科学セミナリー
巻	35
ページ	49-54
発行年	2004-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00019375

パーソンセンタード・アプローチの視点からみた地域臨床

中田行重

1．はじめに

昨今、様々な社会病理的な問題への対応として、心理臨床実践がこれまでの密室における個人心理面接から次第に広がりを見せ始めている。例えば、スクールカウンセリング、子育て支援、被害者支援、HIV 支援、高齢者支援などをテーマとした発表や講演は心理臨床関連の最近の学会では珍しいことではなくなってきた。更に、現代の社会病理的な問題を抱えた人々への支援には心理職だけでなく、福祉、教育、行政、司法、警察、医療、保育など他の職種との協力が必要であることも多く、次第に複合職種による連携やネットワーク作りも進み始めている。

そうした時代の趨勢の中にあって、臨床心理士の第１種指定校では外来の相談施設をもって臨床実践を行うことが義務とされている。そこでは相変わらず、従来型の個人心理面接が主流となって行われている。その点に関して下川（2003）は「心理臨床に対するニーズは95年くらいを境に心理相談室内での個人的ニーズの増加から、被害者・児童虐待・スクールカウンセラーといった社会的ニーズへ明らかに質的に変化している。そのため臨床心理士を増やすことで量的に対応しようとしても、個人臨床の枠組みでは対応しきれないことは明らかで、どうしても視点の転換が必要になってくる」と述べ、個人ニーズとは質的に異なる社会的ニーズに対する“地域臨床”という新しい枠組みを提唱している。

ところで、心理臨床発展の歴史の中には既に、個人臨床の枠組みから質的に異なる枠組みを生み出そうとした学派がある。ロジャーズ（C. R.）によるパーソンセンタード・アプローチである。彼は非指示的療法から来談者中心療法という時期まで主に個人心理療法の枠組みでのクライエントの援助を考えていた。ベーシック・エンカウンター・グループ（Basic Encounter Group、以後 EG とする）にしても当初はカウンセラー養成を目的としており、やはりクライエント援助の枠組みで考えていた。ところが、人間性回復運動を経て来談者中心（Client-Centered）療法からパーソンセンタード（Person-Centered）・アプローチへと変わっていった時、“Client”から“Person”への名称の変化が示すように、彼は個人臨床におけるセラピストとクライエントという枠組みとは異なる援助を考えるようになっていた。EG はカウンセラー養成だけでなく、一般市民の心理的成長の機会としても広く行われるようになった。また、平和問題へのアプローチとして、敵対する人々を対象とした EG を行うようになった。つまり一般市民、あるいは地球市民のために、心理的成長だけでなく、それよりももっと重要で基本的なこと、つまり生命の危機を救うための活動に、彼の心理臨床家としての専門性を、時に自らの命を賭けて、活かすようになったのである。

この“Client”から“Person”へという枠組みへの拡大の背景には社会的な問題があった。一つには世界規模での民主主義への意識の高まりという背景があった。また、EG の平和プロ

ジェクトの背景には核戦争の危機という背景があった。そうした問題に対し、個人臨床だけでは対応し切れないことがこの枠組みの拡大への動因となっている。ロジャーズが当時の他の臨床心理学者あるいは学派とは異なる点は幾つもあるが、個人臨床を行うことが心理臨床家の仕事であった時代に、それとは異なる仕事を自分の専門性を活かして行おうとしたところは特別に大きな、そして優れた違いであろう。これは、パーソンセンタード・アプローチを標榜する現在の人々が継承すべき理念の一つであろう。

現在のわが国の社会病理の問題には個人臨床だけでは対応が困難なものが多くなっている。それが心理臨床関連の学会や研究会におけるスクールカウンセリング、子育て支援、被害者支援、HIV 支援、高齢者支援などの発表の増加となって現れている。そうした現況に対してパーソンセンタード・アプローチはどのような在り方が求められるのか。本稿はパーソンセンタード・アプローチからみた地域臨床について考察を試みるものである。

2．筆者の個人的背景

ここで筆者自身がパーソンセンタード・アプローチという立場から地域臨床を考えるようになった個人的な問題意識を述べ、本稿の論述の方向性をもう少し焦点化しておきたい。筆者はロジャーズの人間の尊重という考えに惹かれ、ロジャーズ学派の心理臨床、特に EG とフォーカシングを研究するようになった。筆者のこの問題意識は、EG に参加するようになったまだ学部生の頃にさかのぼる。

メンバーを限定しない、参加オープンの形式による、あるウィークリーの EG のことであった。10名くらいが参加していた。話題が何となく曖昧となり、メンバー間で雑談が起こっていた時のことである。その EG は福岡市で行われていたが、関西からやってきた飛び入りのある女性が「こんなのはエンカウンターじゃない！」と言って怒り出した。私も含め常連だったメンバーが彼女に「雑談してもいいじゃないか」と反論した。そして、議論はファシリテーターの役割にも及んだ。彼女は「うちらのところではファシリテーターと呼ばずに、世話人と呼んでいる。世話人は～するのが仕事なんや」と言っていた。彼女の迫力にグループは沈黙した。20年も前のことである。今となっては細かなことは記憶にないが、彼女の話は論理的に説得力があったことを覚えている。ただ、それでも筆者は「何か違うんじゃないか」と腹立ち紛れに思っていた。

大学院生となり、少しずつ EG に関する研究を学会で発表するようになった。私の発表に対する反応は２つに分かれることを何度か経験した。１つは「そんなのはエンカウンターじゃない」と強く言う反応であった。もう１つは「中田さんの言う通り。そんなことを言う人が今までいなかったので、言ってもらえてよかった」というような意見を言って下さる反応であった。後者は多くは EG を専門にしていない研究者からのもので手紙や発表後にこっそりと、という形であった。もちろん、筆者は後者の意見に随分支えられたが、私の発表が多くの場合、２つの反応を起こすということに何か意味があるのではないか、と考えるようになった。

この疑問に答が出るようになったのは村山正治先生（現東亜大学大学院）や野島一彦先生（現九州大学）の筆者に示して下さった態度を通してである。このお２人の先生は、筆者とは異なるお考えをもっておられることを示されつつも、筆者のやり方や考え方を支持してくださった。当時、大学院の先輩であった平山栄治先生（現青山学院大学）や高松里先生（現九州大学）も、やはり「君の思うままにやってごらん」という態度で一貫していらした。ある時、

小柳（1991）の「充実した無為を楽しむ場」という、筆者が考えもしなかったEG観の論文を読んで気がついた。それは気がついてみれば当たり前のことであったが、EGには人それぞれの考え方があるのだ、ということであった。筆者の身近にいた上記の先生方はそのことを態度でもって示してくださっていたのであった。パーソンセンタード・アプローチのもつ個人の尊重、多様性の共存という哲学を身近で実践してくれる先生方に囲まれていることに感謝した。そのことに気がついてからは、筆者の発表に対して「そんなのはエンカウンターじゃない」という類の反応をする人がいても、以前のように動揺しなくなり、むしろ、多様性の共存、個人の尊重という哲学を分かっていない人だな、と思うようになった。

考えてみると、ロジャーズ自身は自分の学派を作ったり、人が自分を真似ることに反対し、ミルトン・エリクソンらと同様、それぞれのセラピストが自分学派を作ることが大事であると考えていた。村山正治先生も同じく、自分と同じような弟子を作らないような教育指導をなさっている（神田橋、2003）ように、個人の尊重という姿勢は優れた臨床家が共有している。ところが、パーソンセンタード・アプローチの立場の人が「そんなのはエンカウンターじゃない」というような反応をするのはどういうことだろう？という疑問があった。

3．エンカウンター・グループの目的について

EG研究および実践において多様性の共存という哲学を考えると、ある問題が起こる。それはEGの研究に関してである。EGに関する価値観が多様性を受け入れることは、一方でその効果研究やファシリテーション論の研究の際、何をもって「うまくいったのか」の価値観が研究者各人で異なることになる。すると、そうした研究は結局、個々人の経験を発表しているだけのことになり、一つの研究領域のまとまりとしての蓄積が出来ないのではないか、という問題である。それに対する答は今もなお出ていないが、それに向けての発展途上の考えには辿り着いた。それは、そのような研究をする場合には、研究者あるいはファシリテーターやEGの主催者が、自分のEG観を提示する必要があるということである。EG観に照らしてEGやファシリテーションの効果を考えることが重要であるし、また、たとえその研究者やファシリテーターが「うまくいった」と考えたとしても、それはその人独自の価値観の範囲内でしかないという明確な限定がつくことになる。限定がつく分、より輪郭のはっきりとした確かなデータになる。

この問題は研究だけに限らず、実践の問題でもある。EGの結果を評価する基準として、そのEGが何を目的とするのかも含めて問われることで、初めてこのEGはその目的にどの程度奉仕したかという評価が可能になる。従って、EG観には何の目的でEGを行うのかが含まれる必要がある。その上で、従来のEG実践や研究を見直してみると、EGを行う人の中には「これがEGである」というある理想像をもってそれに近づけようという価値観の人と、何かの目的を志向してそのためにEGを行う人とに分かれることが分かってきた。筆者はそれを“EG像志向的EG”と“目的志向的EG”と命名した（2001）。

この違いは極めて大きい。なぜなら前者は、そのEG像を目指して行うEG経験自体に価値を置いているのに対し、後者はその目的を達成することに価値を置いているからである。後者はその目的達成への方法としてEGを位置づけるので、EG以外の方法との比較することにも意味が出てくるのに対し、前者は他の方法との比較などということに意味はなく、ただEGだ

けを行うことに意味がある。そのために後者ではEG以外の方法や考え方を受け入れるという発想がなく、もしその目指すEG像と異なるEG実践があれば「こんなのはEGじゃない」という、筆者がかつて遭遇した考え方が出てきてしまう。閉鎖的なイデオロギーや新興宗教にはまり込んでしまって他の見方を受け入れられなくなっているのもこの状態である。それは「こんなのはEGじゃない」という排他的な思考であり、多様性の共存や個人の尊重というパーソンセンタード・アプローチの哲学に逆行するものである。結果として、EG像に合う対象をメンバーに選び、EG像に合う場所を会場に選ぶ、ということになって、合わない人は相手にされないことになる。

筆者はEGを目的志向的EGとして、すなわちある目的達成のための手段として用いるべきである、と考える。そして、実はそれはEGだけに限らない。フォーカシングにもカウンセリングについてもそうである。例えば、フォーカシングをすること自体に意味があると考えてしまうと、それは他の心理療法技法論との比較が出来なくなり、フォーカシングのマニアに堕してしまう。そうなると、フォーカシングに向いた人や関心のある人だけが相手にされ、そうでない人は相手にされないことになってしまう。

その点、ロジャーズは典型的に目的志向的な人であった。核戦争の危機という普通はまず心理臨床の対象としては認知されていない問題があれば、その問題の解決のために何が出来るかを考える人であった。彼がその問題のためにEGを用いたのは、EGを押し付けようとしたのではなく、その問題に対して自分が出来ることとしてEGを考えたのである。

4．“個人の尊重”という概念

ここでパーソンセンタード・アプローチにおける“個人の尊重”という概念を考え直しておこう。個人の尊重という哲学のもとにあるのは、個人は自分をよりよい方向に変えてゆくための巨大な資源を有している、という考え方である。EGにしろフォーカシングにしろ、その個人の資源を活かすための方法として考えられている。では実際にそれらはそのように機能しているだろうか？

例えばEGの冒頭に何も言わないのがファシリテーターであるというEG像をもっているファシリテーターは、そこでメンバーが異様な重圧の沈黙を体験していたとしても、何も発言しない。それはそれで1つのEG像志向的EGということが出来るだろう。しかし、それで果たしてメンバーを尊重していることになるだろうか？

メンバーを尊重しているかどうかを判別することは不可能である。メンバーに聞き取り調査をして「尊重されていると感じましたか？」と尋ねて、メンバーの答が「はい」であれ「いいえ」であれ、その回答はファシリテーターがメンバーを尊重したかどうかを表してはいない。表しているのはメンバーがどう感じたか、に過ぎない。判別が不可能なためではないだろうが、EGの冒頭に何も言わないファシリテーターは、それが正しいと思うその判断が覆される可能性がないためか、実に堂々と沈黙を守り通している場合があったと筆者は聞いた。そうした辺りにもEG像志向的EGの問題点が端的に現れている。「これが正しい（理想的な）EG」というEG像があると、メンバーがどう感じているかどうかに関係なく、沈黙なら沈黙、というスタイルを押し通すことになる。メンバーが尊重されているかどうかに気を配るということがなくなる。沈黙を押し通すファシリテーターが「いや、気を配っている」と言ったとしても、それはファシリテーターがそう思っているか言っているに過ぎず、実際に気を配っているかどうか

の証にはならない。そして沈黙を押し通すことで、結果的にメンバーに自分のスタイルを押し付けることになっている。

このことはファシリテーションのスタイルに限ることではない。EG 経験をすることそのものが人々にとってよい、と考えることは結果的に EG を人々に押し付ける可能性をもっている。あるいはフォーカシング経験をすることそのものがよい、と考えることは結果としてフォーカシングを人々に押し付ける可能性を持っている。それが人々を尊重していることになるだろうか？

5．パーソンセンタード・アプローチからみた地域臨床

考えてみると EG にしろ、フォーカシングにしろ、米国で生まれた方法論である。人間関係のとり方も感じ方も大いに異なる日本人に EG やフォーカシングを輸入してそのまま使い続けることが日本人への尊重と言えるであろうか？これは個々の日本人の尊重ということだけでなく、日本という国がもつ様々な独自性の尊重の問題でもある。日本が独自にもっている対人関係の文化や慣習、感じ方などがある筈である。日本は明治以降は西欧の文化を、そして第２次世界大戦後は特に米国の文化の取り入れに懸命になってきた。しかし、独自の対人関係や文化慣習をもつ日本で西欧の文化の産物をそのまま使うことは西欧の模倣に過ぎず、日本の独自性を無視することになるだけでなく、切り捨てることにさえなりうる。

更に、個人の尊重というパーソンセンタード・アプローチの哲学が関係するのは国だけのことではない。国の尊重よりももっと個人に身近なものとしては家族や地域である。個人に“自己治癒力”（中田、1995）があるように、それぞれの家族にも独自の自己治癒力があるだろう。それを活かす家族療法という考え方もあるだろう。また、家族を超え、地域にも独自の自己治癒力というものがあるのではないか。その地域の風土、文化が持つ癒しの力である。そうしたものは１つには古来からの儀式や神話、風俗や人付き合いの風土という形で続いてきているように思われる。そうした地域独自の癒し文化については、色々なものがあり得るであろうが、分かりやすいものとしてはユング派の研究や沖縄のユタなどの研究に現れている。そのような目に見えるものだけでなく、その地域に備わる独自のものがあるのではないか。

個人を尊重するパーソンセンタード・アプローチが地域の尊重を考えることは、発想の自然な展開であろう。現在、個人臨床という枠組みだけでは対応できなくなっている社会問題に対して、その地域の自己治癒力を活かして、地域で出来ることを探ることは極めてパーソンセンタード的なアプローチである。あるいはコミュニティセンタードというべきかも知れない。

EG やフォーカシングを臨床に適用するのではなく、地域の問題に対して何が出来るかを問う。その時に、パーソンセンタードの方法論として EG やフォーカシングを用いるが、それをそのまま用いるのは押し付けと変わらない。地域の問題に合わせて方法を修正、変更するか、別の方法を採用する。「こんなのは EG じゃない」という類の考え方によって、自分の考える方法に固執することは、地域の独自性を無視していることであり、パーソンセンタードなやり方ではない。地域でどのような問題が起こっており、その問題はどのようなアプローチを必要としているのかを探ることが、パーソンセンタードの哲学である。自分の方法に固執することは、対象となる問題や人々をその方法に合う対象に限定することであり、方法に合わない問題や人々は相手にされないことになってしまう。そのようなやり方をしている限り、ＥＧやフォ

ーカシングの専門家で、ロジャーズ派のように見える人であっても、それは本質として全くパーソンセンタードではない。パーソンセンタード・アプローチとは対象とする人々や問題を方法が規定するのではなく、対象となっている人々や問題が先ずあって、それに合わせてその援助や対応の方法を探るものである。

結果としてロジャーズ派にはない方法が用いられるかもしれないし、新たな方法が創造されるかもしれない。ロジャーズ派の中には、ロジャーズのやり方を継承しようとして保守的になっている人々がいるような印象を筆者は個人的には持っている。そのような人には地域臨床という発想自体がロジャーズ派には思えないであろうし、地域臨床に異論はなくてもEGやカウンセリングを用いなければロジャーズ派には思えないであろう。しかし、ロジャーズ自身は、そうやって自分の経験を頼りに自分の方法を探ってきたのである。技法や方法よりも、その姿勢こそが継承されるべきであろう。それに、今の世の中は学派にこだわっている状況ではなく、出来ることは何でもやってゆかねばならぬ時代になっている。

引 用 文 献

神田橋條治（2003）ロジャーズ･村山･ジェンドリン、現代のエスプリ[別冊]ロジャーズ学派の現在、至文堂、266-269

中田行重（1995）学生相談における自己治癒力について、心理臨床学研究 13（1）、97-102

中田行重（2001）研修型エンカウンター・グループにおける問題意識性を目標とするファシリテーション　学位論文（東亜大学）

下川昭夫（2003）ママ・ネットとボル・ネット－個人臨床から地域臨床へ－、東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター紀要3、37-48